

## 生きた哲学としての ドイツ古典哲学

申川 明才

(大学文学部准教授)



### はじめに

私の研究は、「カントとドイツ観念論」という名前で永く呼ばれてきた、19世紀初頭に絶頂を迎える「ドイツ古典哲学」をめぐるものです。(哲学は世界を解釈するのではなく、世界を変革しなければならぬ)というマルクスの有名なフョイエルバッハ批判は、ドイツ古典哲学にも該当すると思われまます。この批判には、従来の哲学は現実の世界から距離を置いた解釈に留まっているという非難と、真の意味での哲学は世界のただ中で、世界を変革しうるまでに、生きられ、具現化されるのでなければならぬという要求とが含まれています。しかし私は、マルクスとは異なり、ドイツ古典哲学には後者の要求に応じる可能性が十分にあると考えています。私が研究で目指す当面の目標は、ともすれば生とは無縁な思想的骨董品とみなされがちなこの哲学を――それがもつ生との緊張関係を見据えつつ、生との統一にもたらずることによつて――今日の種々の問題状況の中で「生きた哲学」に仕上げることにあります。

**非合理主義とは別の仕方**  
さてこの生と哲学の統一という問題

は、ドイツ古典哲学の場合、生と哲学の対立という事態を通して考え抜かれることになりまます。人間の生は、多種多様な側面をもち、その理解の仕方をめぐって哲学上の対立を引き起こします。19世紀になると、ドイツではヘーゲル死後の、理性主義に対する反対運動と相俟つて、生における非合理的な側面が「生への意志」として、ショーペンハウアーによつて際立たされ、その側面をニーチェは、一切を否定なしに生成消滅の運動に呑み込んでゆく「力への意志」という概念にまとめ上げまます。つまり生は論理的思惟では説明のつかない、何か非合理的なものを孕んでおり、その非合理性に古典哲学以後の世代は共鳴した、ということですから。こうした近代ドイツの思想状況を概観すると、ショーペンハウアーらに先行するドイツ古典哲学が生非合理主義に与しないことは明らかです。むしろ生のもつ非合理性を認めつつ、あくまで理性の限界内で生と哲学の緊張関係を引き受けたのが、ドイツ古典哲学の代表者のひとりであり、私がこれまで研究を進めてきた哲学者ヨハン・ゴットリープ・フイヒテでした。

### 生なき哲学の空虚さ

フイヒテは生と哲学の相違を「人体模型」の例を用いて説明しています。私たちは人体模型を精巧に作ることによつて、人間の骨格や筋肉の仕組みに精通すること、人間の生を認識することができまます。とはいえ模型はそれ自身生を欠くものです。この点を踏まえフイヒテは生区別することと生を認識することを明確に区別するとともに、哲学は認識に関わるものであつて、生そのものではないと結論づけます。しかし人間は認識を通じてより一層自らの生に精通することになり、生はその非合理性を弱め、人間にとつて近いものになります。そこでフイヒテは哲学を、生の認識を完成させるもの、従つてまた人間をより生に近づけるものと理解したのです。もちろんこのように理解された哲学は、生の真相をその非合理性に見る立場からすれば、むしろ生を人間から遠ざける、生にとつて敵対的な手続き以外の何ものでもありません。実際ショーペンハウアーはフイヒテの哲学の空虚さを痛烈に批判し、その哲学を「学の抜け殻 Wissenschaftsleere」と揶揄しています。

### 自己殲滅する生と「生きた哲学」

しかしフイヒテは、生と哲学の統一を解明するにあつて、両者をあくまで区別する(と同時に統一への可能性を含んだ)二重性を本質とする「超越論哲学」の立場を堅持しました。それに対して生の非合理主義は最悪の場合、およそ生とは無縁な、あるいは生に反する「生ならざるもの」を生と混同する「熱狂」に至るとされまます。というのも、超越論哲学だけが生と哲学の二重性を、従つてまた生と生ならざるものとの区別を保持しつづける機能をもつにもかかわらず、生の非合理主義はそうした機能をもつ哲学を放棄してしまつているからです。

例えば第二次世界大戦で実行されたホロコーストという「殲滅行為」に見られるように、人間の生が時として生自身に反する熱狂状態に陥るのも、フイヒテであれば、超越論哲学の欠如のゆえであると考えらるでしょう。生自身が果たしてそうした生に反する自己殲滅を望んでいるのかどうかということは今日改めて問われるべきだと思ひまます。少なくとも超越論哲学を徹底し、生と哲学との統一を目指す、哲学を「生きた哲学」に高めると

いう選択肢は、哲学を生かす方法であると同時に、自己殲滅に終わらない生の実現の方法であると言ひまます。

### おわりに

以上述べたように、人間が生にどのように向き合うかは古来より哲学の根本問題であり、そして自らの時代を生きる個々の人間にとつてはつねに現在進行形の問題です。私が文学部哲学科で担当する「社会哲学」や少人数規模の「演習」では、人間の生をめぐる問題に対して、「人間と社会」、「個人と人類」、「利己主義と複数主義」などといった論点に沿つて、同じ問題を考え抜いた哲学者との対話を通じて、参加者各人が自分なりの答えを発見できるように、心がけています。そうした中で思いがけず、単なる非合理主義ともカントやフイヒテとも「別の仕方」での答えが投げ返されることがあります。そこには生を共有する者同士の思索に満ちた対話があります。このような哲学的対話が同志社で学ぶ一人ひとりの「生きた哲学」に通じているという希望と確信をもつて、今後とも授業に取り組みでまいりたいと存じます。

(なががわ あきとし)

## 文化的発展を促す環境づくり のために

河島 伸子

(大学経済学部教授)



### 文化経済論のわかりにくさ

このコーナーでは、自分の研究紹介をするにあたり、「なかなか一般にはわかりにくい分野ですが」という類の書き出しが多いようです。私も、その例にならない、文化経済論というもののわかりにくさから説明しなければなりません。〇〇経済学という空白欄に、医療や教育、福祉などを入れる分には、経済学者はもちろんのこと、一般の方もイメージがしやすいようですが、ここに文化が入った途端に、「??」という反応がかえってくるのはなぜでしょうか。

そもそも、文化を経済分析の対象とするという考え方自体になじみがない人、あるいは抵抗を覚える人は少なくないようです。文化経済学者として優れた業績を残してきたスロスピエの著書「文化経済学入門」の序には、次のような面白い記述があります。

「経済を実際の人間に喩えるならば、男性で、やや太りぎみで、憂鬱症の傾向があり、よく喋り、自分の澁刺さに気づかない傾向にあり、要するに長い間飛行機に搭乗するときには、隣に座りたいと思うような種類の人間ではない(中略)。同様に芸術は、多分女性で、スマートで、

予測することが不可能で、魅力的であるだろう」

要するに、経済学と芸術・文化は、非常に異なるものであり、この二つを結びつけた考え方には強い違和感が残る、という、一般社会における感覚を表現しているのです。

### 文化経済学で扱う「文化」とは

このような不釣り合いさが生まれる原因の一つには、文化という言葉の曖昧さ、多義性があると思われれます。文化には、①社会において後天的に習得され、共有される行動パターン、価値観、習慣などを含む、文化人類学でいうところの「文化」、②こうした行動パターンや価値観を規制・構成する意味・象徴体系、イデオロギーなど(例えば、日本文化、その他宗教、学問、思想など)、③記述、表現、客体化された、知的ないし芸術的活動の生産物、という三つの定義がありますが、文化という言葉聞いたときに、実は多くの人は、最初の意味での文化を想起することが多いようです。確かに、この意味での文化には、自然発生的な部分があり、それを経済活動の一環として見ることは容易ではありません。

しかし、②や③の意味での文化となる

と、①の文化に比べて格段に具体性を増していることに気づきます。例えば学問や宗教であれば、大学や寺院などの施設・組織が存在し、そこに資金が流れて研究・教育・布教活動などに使われていくので、これは立派な経済活動であると言えます。③においても、同様のことが言えます。「記述、表現、客体化された」文化とは、①でいうところの価値観や②の思想を背景として、それを具体化したもの、という意味です。具体的には、芸術分野の全て(美術、音楽、映像、演劇、舞踊、文学など)、建築、デザイン、工芸、広告表現物などの応用芸術、放送、出版などのメディア、ゲーム、歴史的建造物、文化遺産、あるいは特に日本では書道、華道、茶道などの生活文化なども含めることができます。文化経済学的主流ではあまり扱われることがありませんが、スポーツや食といった、私たちに身近な「文化」を含めてもよいでしょう。

これらの活動が、ある種の産業を形成していることは明らかです。出版、映画などにおいては、通常、営利ベースで活動する企業が存在し、創造活動の成果物をパッケージ化し、流通させる活動に携わっています。また、非営利の美術館に

しても、学芸員を雇用し、収集・保存・調査活動を行い、展覧会を企画・運営し、入館料を徴収、寄付金や補助金を受ける、というように、立派な経済活動を行っているわけです。

このように、文化経済学では、文化の創造・流通・消費を経済活動として理解し、より質の高い文化が数量的にも多く生産されるにはどのような仕組みが望ましいのか、それをより多くの人々が享受するために、どのような制度が必要なのか、といったことを研究しています。

### コンテンツ産業研究

さて、近年私の研究対象の中心となっているのは、芸術や非営利の文化活動ではなく、娯楽、メディアといった営利ビジネスとして通常成立している産業(これを特にコンテンツ産業と呼びます)です。これらの産業の特徴は、アーティスト、クリエイターが制作する原作品を、出版社、レコード会社などの業者が商品化し、それを大量に複製し、市場に流通させていくという点にあります。美術やクラシック音楽などが一点物や生の体験を売り出すこととは、大きく異なります。

私が特に関心を持っているのは、コン

テンツ産業の生命線とも言える著作権の問題です。一般には、インターネットを通じた違法ダウンロードやファイル交換などにより、どの産業も経済的打撃を受けていると言われていますが、著作権制度がデジタル社会にそぐわないことにも問題があります。今日では、ファンなどの中でやりとりを繰り返して、既存の作品に工夫を加えていくというように、集団的な活動から創造的な作品が生まれたりもしています。これも、著作権法上は問題になり得るものばかりです。この法制度がなければ創作への誘因がなくなる、と思われていますが、これほどにデジタル技術が発達し、普通の人が創造活動と成果物の発信に携わることができると、18・19世紀の文化観を土台にした著作権法がどこまで妥当なのでしょう。このような大きな問題意識を持ちつつ、ここ数年は、より個別のテーマ研究、産業研究を進めています。技術変化の激しい領域でもあり、情報面ではついていくのが大変ですが、研究者としてどっしりとかまえて、大きな流れを見据えていくように思います。

(かわしま のぶこ)

## 文化情報学部における国文学研究 —情報科学との連携と学生参加型研究の実践—

福田 智子

(大学文化情報学部准教授)



### 平安朝の和歌研究 —歌人・伝本・表現—

今から5年前、同志社大学に文化情報学部が設置されたと同時に、私は、生まれ育った福岡から京都へ赴任しました。文学部国文学科で平安文学を学んできた者にとって、京都という土地はとても魅力的です。なんといっても、文化の中心。研究活動には、これほど恵まれた場所はありません。

平安文学の中でも、私がとくに興味をもっているのは、10世紀後半から11世紀にかけての和歌文学です。勅撰和歌集(帝の命令で編纂された歌集)の成立でいえば、『後撰和歌集』から『拾遺和歌集』(二番目と三番目の勅撰和歌集)の頃。かの『源氏物語』が、ちょうど『拾遺和歌集』成立の頃に、初めて文獻に登場することはよく知られています。

和歌文学研究には、歌人・伝本・表現などの研究テーマがあります。歌人研究は、系図や古記録といった史料を参看して、歌人の伝記を考証するもの。また、伝本研究は、ある歌集の伝本(現在まで伝わってきた写本・版本)を複数集め、

和歌の配列を比較したり、本文の異同(ことばの違い)を調べます。さいごの表現研究は、ある歌人、ある時代の和歌表現の特色を明らかにするものです。研究を続けていくと、これらのテーマのいずれかに比重を置くことになってしまいがちなのですが、すべてのテーマに対して研究の勘が鈍らないよう心がけています。

### 「文化情報学部」という学部

文学研究のためにやってきた京都。しかし、着任するのは「文学部」ではなく「文化情報学部」でした。情報処理やコンピュータやら、機械を使うことについてはまったくの素人ですから、この就職は、周囲の人たちを少なからず驚かせたようです。

「文化情報学部」では、人間が生み出した文化事象を対象に、情報科学の手法を用いて分析する研究・教育を行います。言い換えれば、コンテンツは文化、分析手法はコンピュータ。これまで人手では事実上分析不可能であった膨大で複雑な文化データを、適切に処理することによって、その混沌としたデータの中か

ら新たな知見を得ることを目指すのです。

私はこれまで、高校の同級生である情報科学研究者との共同研究で、コンピュータを用いた和歌の文字列解析による国文学研究を行ってきました。先に触れた歌人・伝本・表現研究においても、この技術は生かされています。もし、彼との出会いがなかったなら、京都の地にも、きっとご縁がなかったことでしょう。

### 文字列解析ツールの開発

竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)は、高校時代、文芸部に所属し、また、総合理工学研究科修士1年の時には、自ら『古今和歌集』の本文を電子テキスト化するなど、文学にはとても興味をもっていました。1996年8月、古典和歌約45万首を1枚のCD-ROMに収めた『新編国歌大観』CD-ROM版(角川書店)が発売されたことで、私たちの「五・七・五・七・七の世界を独自の手法で分析してみたい」という意欲は、ますます高まっていたので

く話し合いを繰り返しました。その結果、彼が作成したのが、文字列解析ツール「eCSA [efficient character string analyzer、通称「いーくさ」(博多弁で「いいんだよ」の意)]」です。このツールは、論文を書く時だけではなく、文化情報学部における授業や、次にご紹介する学部学生の自主ゼミにも活用されています。ツール作成者自身が文学を好み、その本質がある程度理解していたからこそ、このような利用価値の高いツールができたのだと思います。

### 専門的な国文学研究を学生参加型に

国文学に興味を持っている学生ばかりではない文化情報学部においても、「いーくさ」を使うことにより、かなり専門的な国文学研究に学生が参加しています。

たとえば、学部学生の自主ゼミである「歌語研究会」。ここでは、科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」(平成19・21年度)の一環として、2年次生から4年次生までの学生有志が集まり、『古今和歌六帖』の注釈

をおこなっています。

この歌集は、『万葉集』や『古今和歌集』『後撰和歌集』など、先行する歌集から歌を引用し、題ごとに分類したものです。ですから、まず、『古今和歌六帖』の歌が、先行するどの歌集の歌なのか、チェックする必要があります。その重出歌調査のため、「いーくさ」の「類似歌抽出機能」を用いて、データ整理を行いました。これにより、重出歌をチェックすることが、学部学生にとっても、比較的簡単になったのです。

専門性の高い科研研究と学部教育とを結び付けることは、必ずしも容易なことではありません。けれども、情報科学の分析手法を利用することにより、国文学が、すべての学生にとって、より身近な存在になればいいと思います。忙しいときには、自主ゼミを行っている学生の傍らで、別の仕事をせざるを得ない時もあるのですが、最近では、影印本の読みから用例収集、レポート執筆まで、きっちりこなす学生が増えました。今後、学ぶことの喜びをひとりでも多くの学生と共有していきたいと思っています。(ふくだ ともこ)

## 気分はニュースキャスター 「動画レポート」の取り組み

加藤 敦

(女子大学現代社会学部教授)



### 素晴らしい同志社のIT環境

近年、教育機関においてマルチメディアなどIT環境が整ってきたが、まだまだ社会科学系の学生がこれらを利用する場は限られている。その点、同志社のIT環境は素晴らしい。同志社ローム記念館にはプロ仕様のスタジオがあり、女子大学内の各種情報処理室とあわせ学生達はいつでも最新のIT環境に触れることができる。IT実務家の方々との研究会などでこうした話をするお褒めいただくことが多い。私は恵まれたIT環境を活かすため、2005年度より「動画レポート」を試みている。

### 「動画レポート」の取り組み

女子大学現代社会学部社会システム学科(1学年の定員:300人)は、国際、京都市・観光学、ビジネスマネジメント、ライフマネジメント、法システムの五つのコースから成る。学生達は3年次にコースを選択し、コース科目を中心に各自にあった学びの体系を組み立てる。

私はビジネスマネジメントコースの応用演習(3年次後期)において、グループ研究として「動画レポート」提出を課している。サプライチェーン、中心市街

地活性化、企業の社会的責任など毎年設定される全体テーマの下、3人程度のグループに分かれ、それぞれが論点を設定し調査を行う。

標準的なスケジュール例を示そう。第1回から第3回はキックオフ・ステージで、テーマを決め基本文献により論点を定める。第4回から第9回は調査研究ステージで、雑誌記事、新聞、決算書、社会的責任報告書など既存資料を調べ、紙媒体およびスライド資料にもつき相互評価する。第10回以降は「動画レポート」作成ステージで同志社ローム記念館を利用しスタジオ撮影を経て動画編集を行う。学生が提出した「動画レポート」は教員が他グループと併せて編集し、DVDとして学生に返却する。

### 学生達の表現力に脱帽

「動画レポート」の性格を一言で言えば、スライドを用いたプレゼンテーションを記録・編集したものである。同志社ローム記念館スタジオにおいてクロマキ(画像合成)を用いてスライド資料と発表者を組合せた動画像を作り、後にそれを10分ほどに編集する。わかりやすく説得力があるレポートを作成するには、ス

ライド資料の品質と、発表者のコミュニケーション力が問われる。ここで学生達の豊かな表現力がいかんなく発揮される。グラフやイメージ画像を配したスライド資料の様々な工夫や、堂々としたプレゼンテーション姿に毎年、感心させられていく。

### 難しい取材の位置づけ

「動画レポート」において、長所にも短所にもなるのが取材である。取材には被取材者をして語らせるといった醍醐味がある一方、通常の紙媒体レポートに比べかなりの負荷がかかる可能性がある。す



「動画レポート」に取り組む学生

なわち「屋外ロケ」撮影・音声録音など技術的問題、編集時において協力者の発言意図が誤解・歪曲される可能性、撮影場面をカットする際の協力者への配慮などである。

取材は魅力的だが、授業という時間や資源に制約がある状況下では、負荷が大きすぎると、既存文献調査や分析に任せがくる。取材か、既存資料か、いずれを重視するか判断する必要がある。私は三つの方法を試行した。2005年は各グループが個別に紡績、コンバータ、アパレル等に取材した。2006年度は取材回数を減らすため全員で金沢市中心市街地を訪れた。2007年度以降は取材を実施せず既存資料のみとした。これらは一長一短があるが、近年の就職活動早期化から負荷のかかる取材は難しくなりつつある。

### 組織運営力をも身につけよう

学生達は「動画レポート」作成に向け期間限定的な組織(プロジェクト)を運営する。一般にプロジェクトの品質はTime(工期遵守)、Quality(品質確保)ならびにCost(成員間コスト負担の公平感)で評価される。当初、私はITスキ

ルが高い者に作業が押し付けられ貢献不平等が生じることを懸念し、各グループに対し作業日誌の作成・提出を義務付けた。結局、こうした心配は杞憂で、学生達は互いに助け合ってプロジェクトを進めてくれた。時間的制約とある程度のプレッシャーは、彼女達に自分がグループの中でどういう役割を果たせるか、考えさせる良い機会になったようである。また「動画レポート」製作にあたっては文書、画像、音楽などの著作物を扱うが、参考文献の表示、図表の出所明記、写真の使用許諾など、自然にルールを身につけていった。

### スタッフの皆様へ感謝

率直に言って「動画レポート」は結構手間がかかるし、それなりの技術知識も求められる。こうした取り組みに私のような素人でも挑戦できるのが、同志社の素晴らしい点であると思う。私や学生達の初歩的な質問にも笑顔を絶やさず対応いただいた同志社ローム記念館や女子大学のスタッフの皆様、学生達に成長の機会を与えて下さり本当にありがとうございます。

(かとう あつし)



## My Assignment Found Through Experience

塩川 奈津子

(国際中学校・高等学校教諭)

### Myself

Looking back on these four years spent teaching at Doshisha International, I see that I have been able to meet wonderful students, and the list of experiences shared with them is long, I cannot think where to start. To become a teacher was my dream since elementary school, and I still cannot believe that it has come true. Doshisha International was, and still is, a great place for a soft-landing to Japan for a lost returnee, just as I was. Once I had seen the world outside the gates, I was determined to go back to Doshisha International to share what I had come across. I felt the need to share the difficulties and surprises I experienced to prepare returnees for what might await them in the future.

I spent much of my time abroad; ten years in England and three years in Italy, and after graduating from school I was gradually realising that I was not as Japanese as I was 'supposed' to be. Sometimes, people said I was strange because I did not dress like a Japanese person, or use respectful term when talking to someone elder than me. I was told frequently that I wasn't Japanese because I did not act Japanese, even if my nationality was Japanese. This experience was stressful, and I felt lost at the time and ashamed of myself for not being good enough. I went on several journeys and an exchange programme to seek my true identity, to find out where I belonged.

By becoming a teacher at Doshisha

International, I was determined to help students lessen the impact of this unhealthy culture shock when they came across others who had not met many people of diverse backgrounds, or who had never lived in various parts of the world in their life like other students at Doshisha International. The feeling of belonging nowhere was certainly a shock, and I made it my life project to prevent people feeling ashamed of themselves.

### Our Students and English Classes

Our school consists two-thirds of returnee students from various parts of the world, and a third of students who have based their studies in Japan. Therefore the students' English language experience varies widely and three types of English classes exist: General (ESL), Seminar A, and Seminar B. This structure allows students to study with classmates who have similar backgrounds and who can work on similar weaknesses in the same classroom. The Seminar classes are usually taught in English, and students learn English through reading, watching video media, writing, and working on projects. Here I would like to introduce two projects I have done with the students in the past.

### School Promotion Project

In the School Promotion Project, students make movies showing different aspects of our school. I have done this project twice for

different purposes: a memoir of student's time at this school, and the other, a video about Japanese culture at Doshisha International. Before making their own movie, students saw a film that showed a foreigner having difficulty adapting to Japanese culture, for example, a shower fixed too low on a wall, people bowing to greet each other, etc. They then had to reflect on their own school. Students divided into groups to take various scenes: morning assembly at the chapel, changing shoes before entering the school, classes, club activities, etc. They came up with the ideas and took videos of themselves starring and interviewing their peers or teachers to make it more interesting and unique. Students were extremely imaginative and learnt so much about how some parts of their school are so 'Japanese' and some parts are so 'not-Japanese', but unique, special, and comfortable for them. It ended up being essentially like a school promotion video; one that could actually be used to explain what student life at Doshisha International is like.

Through these projects, students not only learn how to express themselves in English, but also how to communicate with their classmates in English when they use the camera, edit on computers, and also when they input subtitles for the Japanese interviews.

### Finding your Own Identity

One of the main projects I am focusing on addresses how to help students find their own identities and understand how important this issue is for some people. We use many video media and books.

One year I used the book, **Looking for Alibrandi**, about a teenager called Josephine living in Australia and of Italian descent. She is struggling between her Italian and Australian cultural identities. She has lived in Australia her entire life, but has been brought up in an Italian community.

Many of my students loved this book since the setting reminds them of their time spent abroad. They not only have to read and discuss certain topics with their classmates, but have to write summaries and answer worksheets for each chapter before the class is taught. Students also need to explain each chapter in turn as if they were the teacher; making handouts for

clearer understanding and being prepared to answer questions answered is part of this work. For this activity to be successful, I usually start them off, showing them how I would like it to be done, making clear explanations, and using a range of activities. I make sure that the student is ready by going through each students' presentation before he or she actually stands in front of the class. Of course, everything is done in English, and students realise that studying literature by themselves and not just relying on the teacher is fun. They also understand important topics in more depth. After reading and discussing the book, students are then asked to write an essay or story illustrating a similar experience they have had due to their race, ethnicity, nationality, or stereotype images. This is usually a good exercise for them, and some of these essays have been published on the Child Research Net homepage.

(<http://www.childresearch.net/>)

There are many ways to teach, and innumerable messages we must send to students as teachers. I hope that students realise mistakes made in the past can also be made in the present, and that is why we talk about historical events, and reflect them to our lives too. Although students may not experience what I have experienced, I wish for them to be aware that certain individuals do have identity issues, which they cannot be blamed for. Teaching at this school and meeting a wide variety of students, I have also realised that I not only *teach* them, but also *learn* with them through discussions on various topics and also by sharing opinions and feelings about sensitive topics. There is never one answer to a question about identity, which shows exactly why returnees feel lost once they come 'back' to Japan. It is because people tell them they must belong somewhere, when there is actually no need to. What matters is how one feels most comfortable, and what kind of person the individual is, not where they are from. My assignment as a teacher here is to pass this message on to other generations. "Be proud of who you are. You're great the way you are. Respect others for what they are, too."

(Natsuko Shiokawa)

## いい学び(e-manabi)しよう ～eラーニングを活用した自主的な学び～

### 反田 任

(中学校教諭)



#### はじめに

本校では、生徒全員がメールアドレスを持ち、昼休み、放課後には図書館で自由にノートパソコンを使用することができ、またほぼ全生徒の家庭にはインターネットに接続されたパソコンが使用できる環境にある。そのような環境の中で、授業を補完するため、家庭学習や休職中の学習にeラーニングを活用できないかと考えた。eラーニングは時間や場所の制約を受けることなく、学習者のペースで学習が進められるという利点から効果的、効率的な学習の手段として注目されている。一方でそのシステムの構築にはハード、ソフトも含め多額のコストがかかることが多い。2008年6月に中学3年生を対象に開設したeラーニングの英語学習サイト(e-manabi)構築には、国立情報学研究所から公開されているオープンソースのCMSツールであるNetCommons1.1(<http://www.netcommons.org>)を利用した。Webブラウザ上でeラーニング環境が構築でき、メンテナンスも容易である。

#### eラーニングでめざすこと

eラーニングを活用する目的は、学校での対面授業とそれを補完する家庭学習の連携を図るためである。eラーニング

を活用する利点として、次のような点があげられる。

- (1) 学期中、休職中にもかかわらず教師が提供したい教材をいつでも追加・更新できること
- (2) 生徒が「いつでも、どこでも、繰り返し」学習することができ、各人に適した教材を「自主的に」選択し取り組むことができること
- (3) 掲示板等で学習内容に対する質問・回答など教師と生徒間の双方向のやりとりが可能であること

NetCommonsには多くの機能があるが、PDFファイル化した学習教材を配布したり、単元・文法項目のまとめに小テストを行う機能を主に利用した。また単元ごとの生徒理解度を把握するため、アンケート機能を利用しその結果を授業づくりにフィードバックすることで、分りやすい授業をめざすことができた。

NetCommonsではログインの状況、生徒が小テストやアンケートに取り組んだ結果等が自動的に生徒ごとに一覧で管理され、教師が各生徒の学習状況を把握できる。小テストの解答や学習理解度のアンケート結果も自動集計される。従来、手作業で行っていた採点や集計作業に費やす時間が少なく、その時間を授業準備

備や補習などに有効に活用できることが教える側にとっても大きなメリットである。

#### 生徒の反応

昨年、e-manabiのwebサイトの開設時に英語を担当していた中学3年生3クラス(男子52人、女子55人、計107人)を対象にしたアンケートでは70・1%が「今までにコンピュータを使って教科の学習をしたことがある」と答え、「インターネットを通じて学習したいと思いませんか」という質問に対して、78・5%の生徒が「学習したいと思う」「少し学習してみたい(興味がある)」と答えている。さらに「インターネットを用いた学習にどんなことを期待しますか」という質問に対しては、「いつでも学習できる」「くり返し学習できる」「学習を深められる」「復習に役立つ」「場所を選ばない」の順に期待度が大きかった。



eラーニングを活用した授業の様子

e-manabiは生徒にとって

有用だった様子で、6月～2月の間に延べ2192回のアクセス(ログイン)があり、生徒一人あたりのアクセス回数は、最高70回、最低4回、平均19・9回であった。生徒は定期考査に向けての学習のために、自動採点のできる小テストや、授業で配布した練習プリントのダウンロード(延べ2257回)等数多く利用していた。このように生徒は必要に応じて上手くe-manabiを家庭学習に利用していたようである。

2月の時点でeラーニングの活用について生徒にアンケートを取ったところ「おおいに活用したい」「まあまあ活用したい」が合計68・2%となり、ほぼ3人中2人の生徒に積極的に活用したいという姿勢がうかがえた。また学習の理解度についてのアンケートでは、関係代名詞、前置詞の単元において、授業が「少しわかりにくい」「わかりにくい」と答えた生徒はそれぞれ合計10・8%、11・8%であったが、e-manabiの問題に取り組んだ後、「あまり理解できなかった」「ほとんど理解できなかった」の合計は7.0%、5.0%へと減少が見られた。授業での理解が不十分と思われる生徒がe-manabiで学習することで、理解をより深めることができたと感じているようだ。このように

eラーニングは、生徒の学習意欲を引き出し、自律的な学習を促す有効な手段であり、学習者がそれぞれに応じた利用をすることにより、学習効果を高めることができる。

#### 今後に向けて

e-manabiの英語学習サイトが生徒の家庭学習の一助となり、自ら課題や問題を選択して取り組むという自主的な学習意欲を引き出すことに一定の効果があったことは喜ばしい。

今後の課題として、アクセスの少ない生徒への働きかけも含めe-manabiの内容をさらに充実させること、学習不振生徒の効果的な活用方法の検討が必要である。また欠席、不登校生徒の自宅学習システムとしての活用などさらに用途は広がっていくと思われる。今年度は新型インフルエンザで学級閉鎖になったクラスの生徒への教材配布をe-manabiを通じて行った。現在、NetCommonsはバージョンもアップし、動画対応や携帯電話からのアクセスも可能になっている。これからも生徒の学習意欲を引き出すために様々な活用を試みていきたい。

(英語学習サイト)

<http://e-manabi.sakura.ne.jp/>

(たんだ たかし)